

説得力のある文章を書く生徒の育成

- 1 はじめに
- 2 研究のねらい・仮説
- 3 研究の実践
- 4 成果と今後の課題

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動の取組状況

本次の国語教育の分野に提出されたリポート数は、話す活動と書く活動を関連づけたレポートが2本、語彙指導に関するレポートが1本、読む活動と話す活動を関連づけたレポートが1本、書く活動に関するレポートが7本、計11本であった。

児童生徒の「やってみたい」「学習したい」という主体的な学びを生み出すために、身近な題材を取り上げたり、自らが題材を考える場を設定したりすることで、単元全体を通して主体的に学習する態度を持続させる工夫が多くみられた。また、単元内自由進度学習を行い、一人ひとりが自分の興味関心に合わせて学ぶ内容や時間を考えて学習をすすめることで、見通しをもって学ぶことができる実践もあった。どのリポートからも、一人ひとりの能力を見取り、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をめざし、先生が奮闘している姿を感じ取ることができた。

2 今次教育研究集会で論じられた主な課題

(1) 主体的に学習にとりくむためのてだてや支援の方法について

語彙を獲得するために、ヒントカードや評価規準表などを与えた実践、視点を明確にした振り返りシートを作成し、自己の学びをメタ認知する実践、単元内自由進度学習を取り入れ、児童一人ひとりが見通しをもって書く活動をすすめていく実践が報告された。討論においては、協働を行う際、能力の差により一方通行の活動になってしまうことへの改善策はないか話し合われた。意図的グループを組んだり、同じ内容でペアリングしたりと、さまざまな事例が紹介されたが、みんな同じ悩みを抱えている様子であった。また、自由進度学習については、なかなか実践として取り入れていない現状があり、評価の仕方や知識・技能の定着の方法など、活発な話し合いがみられた。

(2) 言葉や文章で自分の思いを相手に伝えるためのてだてや支援の方法について

児童生徒自身で題材を設定し意欲を高める実践、表現を工夫して書く実践、思考ツールを活用した実践が報告された。討論においては、複数のモデル文を提示し、比較することで説明的文章やポスターなどを書くための技能の定着がはかれること、観点を与えて文章を推こうすることで、内容面に関心を寄せて互いを評価することができるようになることなど、自身のこれまでの実践を含めて話し合いが行われた。

3 今後の課題

どの実践も、学校・学年・学級に応じ、一人ひとりが主体的に学ぶことができるようなてだてが講じられており、よりよい国語教育にむけた熱意あふれるものだった。討論においては、互いの実践についてさらに深く学ぼうと活発な話し合いが行われていた。国語科における自由進度学習はまだ踏み出すことができていない現状があり、今後は各領域において、どのような内容でどのようなすすめ方で自由進度学習を実践していくことができるかを検討していく必要がある。国語科における自由進度学習を確立し、より一層の個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をはかる実践に期待したい。

〈澤田佳予子・谷田孝〉

報 告 書 の で き る ま で

この報告書は、73次に及ぶ愛教組連合教育課程研究委員会の研究成果をふまえ、単組・県の研究・討議を経て作成されたものである。報告書の作成にあたり、ご指導いただいた助言者の先生をはじめ、関係の諸先生方に深く感謝の意を表す次第である。

助 言 者	澤田佳予子（愛知教育大学）	谷田 孝（名古屋・福田小）
教育課程研究委員	後藤 佑介（名古屋・大須小）	仁科真由美（尾北・（江南）北部中）
	大館 隆也（瀬戸・幡山東小）	柴田美佐里（みよし・南中）
	蛭川 義之（一宮・大徳小）	小山 和哉（豊田・竜神中）
	江口 珠実（尾北・犬山中）	

1 はじめに

本校では国語科の研究主題を「自ら考え、判断し、決定し、行動する生徒の育成～生徒の考え、変容を大切にしたい授業改善を通して～」とし、「言葉」にこだわり抜く生徒の育成をめざしている。生徒の様子を見ていると、文章を書くことを苦手としている。そのために、教材が終わるごとに100文字程度で印象に残った場面の感想や主人公に関すること、筆者の書き方の工夫についてまとめを記述している。しかし、段落の構成などの書き方がわからなかったり、語彙力がなく、書いたりすることに苦戦している。そもそも大まかな流れで教材を理解しているだけで、正しく教材文が読めていないことも要因であると感じた。

本研究は、2022年の1年生と2023年の2年生で実践を行った。自分の考えを形成するために、教科書本文中の筆者の書き方の工夫や今後自分自身で作文を書く際に使いたい表現を生徒どうしの対話を通して、考えを広げたり、深めたりしながら、研究主題に迫ることをねらいとした。

2 研究のねらい・仮説

仮説① 初読と授業後の感想の比較や新聞作りをすることで、思考の変容を確認できるだろう。→タブレット端末でのデジタルポートフォリオの使用

仮説② 見つけた筆者の書き方の工夫をまねすることで、説得力のある文章を書くことができるだろう。

2022年度は、上記の2つの仮説にもとづき実践を行った。2023年度は、以下の仮説を追加し、実践を行った。

仮説③ 筆者の意図を考えることで、説明文を豊かに読むことができるだろう。

3 研究の実際

(1) 単元の設定

ア 単元・・・中学1年生 筋道を立てて 根拠を明らかにしながら伝え合う

『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」(鈴木俊貴 国語1 光村図書 2021)

イ ねらい

本教材は、仮説検証型の説明的な文章である。生徒は、文章の構成や展開が筆者の意見に説得力を与えることを学ぶ。教材は、「前提となる知識」「研究のきっかけと仮説」「仮説の検証Ⅰ」「仮説の検証Ⅱ」「結論」の五つの部分で構成されている。筆者は、まず仮説を提示し、何を検証しようとしているかを明確にする。そのうえで、二つの実験によって仮説を検証し、その結果をもとに、自らの仮説の妥当性を確認するという構成になっている。実験・観察によって得た事実をもとに、仮説の妥当性を主張するという論の展開が、筆者の主張に説得力を与えている。

また、本教材の説得力を高めるための工夫に、意見と根拠の関係性がある。他にも、本文で示されるグラフや図表、写真など実験の様子や結果をわかりやすくするための工夫が施されている。本文とあわせて読むことで、本文の記述だけでは想像しづらい実験の様子などを詳しく知ることができる。それによって、結論の説得力を高めている。この工夫を生徒に見つけさせ、書き方の工夫を自分の文章にいかしてほしいと思う。

ウ 抽出生徒の設定

A・・・入学当初から、勉強を苦手としており、「できない」「やりたくない」を口に出すことが多い。しかし、10月以降から徐々に勉強をがんばり始め、家でも学習の時間を確保するようになった。授業中にもわからないことは教員や周りの生徒に聞き、学習意欲が向上し始めた。

B・・・入学当初から学習意欲が高く、授業中はすぐに読み取り、テストでも上位に入っている。しかし、文章を書くことを苦手としており、文章を書く課題はとりくみに時間がかかる。

(2) 実践

教材の始まり、第1時にはデジタルポートフォリオを使って感想を書かせるようにしている。生徒たちは学習に意欲的であり、本文を聞いて疑問を出すことは容易である。しかし、筆者の意図を読み取ることにはつながっていない。自分たちの疑問を友だちと協力して解決し、自分の考えをまとめることができるようになってほしいという思いから実践を行った。

【A】

第1時の初読の感想

鳥は同じ鳴き声しかないと思っていたけど、敵が来たときとかはいつもと違う鳴き声なんだなと初めて知った。ジャージャーという鳴き声はヘビだけを表す鳴き声で天敵全部にジャージャーという鳴き声を使わないのは、なんでだろうと思った。

教材学習後の感想

ジャージャーという鳴き声は、つがい協力してヘビを追い払う上で役立っていることがわかった。

この授業を受けて、ものを説明するとき言葉だけでなく図やグラフを使うとわかりやすく伝えることができるなと思った。使う言葉にもよるけど言葉だけでなく図やグラフを使うと結果がわかりやすく伝わるなと思った。文末表現も「た」で終わるのが多いけど全部の文末が「た」だけで終わってなくていろいろな終わり方をしているなと思った。自分が文を書くときいつも同じ終わり方しかしてないと思ったので次書くときはいろいろな終わり方を使いたいなと思った

2つの感想を比較すると、文章の量の違いは明らかに感じられる。第1時の際に出た疑問を解決しながら授業をすすめた。教材学習後の感想を見てみると、筆者の書き方の工夫を見つけられている。また、授業では目的、方法、結果、考察、問題点の5つの観点で内容を読み取るため文末の表現を意識した。例えば、実験や観察の結果は「示しました」「結果となりました」、考察なら「解釈できます」「考えられます」である。このような言葉を見つけることで、「5つの観点でまとめることが簡単だった」と言う生徒が多くいた。この気付きからAのように文末表現を工夫したいと感想が多く出ていた。

【B】

教材学習後の感想

今日は、段落ごとに、つながりがあることや、グラフや図を使うことで、より読者の理解が深まるということを知った。もうすぐ発表会があるので、図やグラフ、文末表現に気をつけてまとめようと思った。

Bの感想から、見つけた筆者の書き方の工夫を国語の授業以外の総合的な学習の時間にも活用しようとする意欲的な姿をみることができた。

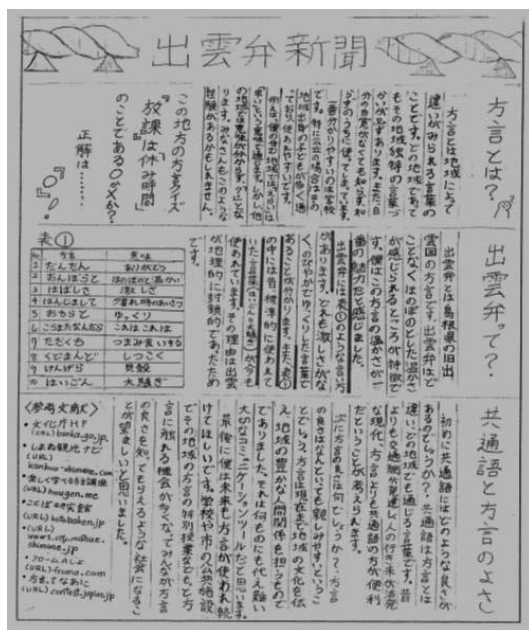
授業では、初読の感想や授業後の感想などグループで共有してから、全体で発表する形をとっている。グループで共有する際は、ただ聞くだけでなく、「感想の感想を伝える」ということで、発表した生徒に対して共感したこと、質問など感想をいうようにし、さらに話を聞く姿勢を高めようとした。さらに、班で選ばれた生徒をクラス全体で発表させることで、感想の書き方を学ぶ場面を設けた。

また、どれくらい学んだことが身についているかをはかるために、教材「方言と共通語」においてパフォーマンス課題を出した。生徒が気に入った方言の歴史的な背景や文化、おもしろいところをクイズや早口言葉などを用い、共通語のよさとともにまとめるものである。以下の評価基準を事前に生徒に提示した。既習事項を項目に入れることで教員側から見てもどこを生徒が理解し、苦手としているかわかる形となった。

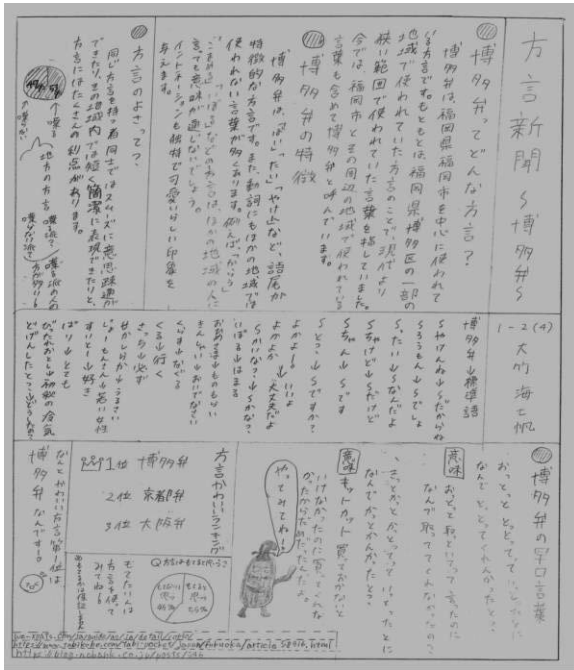
★評価（5段階評価）

	① 資料活用	② 構成
5	効果のある資料の使いか	段落と段落を適切に結びつけ、わかりやすい文章となっているか
4	一つの事柄で複数の参考文献にあたれているか	段落分けがされている文章であるか
3	出典は明記されているか	主語と述語、修飾語など、文節どうしの関係は適切であるか
2	資料を使って文を書けているか	短文でわかりやすく書かれているか
1	提出できている	提出できている

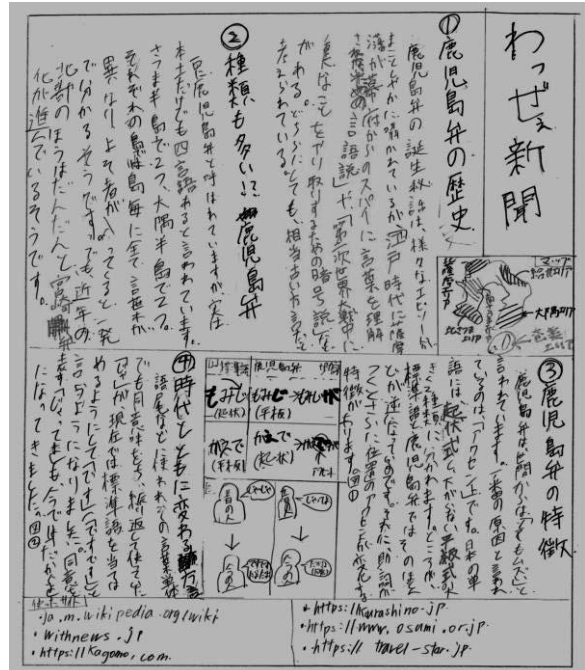
【資料1】



【資料2 A】



【資料3 B】



【資料1】では、『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」で見つけた筆者の工夫の一つである表の効果的な使い方をまねようとしているのが感じられる。傍線部「出雲弁には表①のような言い方があります。」「また表①の中には昔、標準的に使われていた言葉が今も使われています。」という表現である。効果的に図表を用いながら話をすすめていく筆者の書き方を読み取り、自分の作品にもいかすことができている。

【資料2】のAの作品は、構成②の自己評価を「1」としていた。しかし一文を短く書き、段落を意識していることが読み取れる。書くことに苦手意識があるからこそ、自己評価を低くしてしまっていると思う。【資料3】のBの作品は、唯一カラーで仕上げてきた。伝えたい部分を強調したいという思いからカラーペンを使っていた。段落構成などは意識しようとしているが、図表との関係性はなかなかまだ結びつけることが難しいように思う。

課題を提出した後自己評価を行った。以下の表が結果である。

	① 資料活用	%	② 構成	%
5	効果のある資料の使い方か	8	段落と段落を適切に結びつけ、わかりやすい文章となっているか	3
4	一つの事柄で複数の参考文献にあたれているか	3 8	段落分けがされている文章であるか	3 0
3	出典は明記されているか	4 8	主語と述語、修飾語など、文節どうしの関係は適切であるか	3 5
2	資料を使って文を書けているか	1	短文でわかりやすく書かれているか	1 0
1	提出できている	3	提出できている	1 5

このように②構成は、生徒の中で自信がないと思っている。

また、1年を通した授業の振り返りを行った。

「方言新聞を書く際に参考にしたことは」という質問に対しては、「言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」やインターネットをあげていた。また、家族に聞いたという意見もあった。

以下の文章は、方言新聞を作成した感想である。

【A】

新聞を作っている人は大変だと思った。

【B】

はじめはいやだったけれど、やってみると楽しくて、書いたことについて意欲や積極性がうまれた。

以下の文章は、1年を振り返っての感想である。

【A】

(デジタルポートフォリオに) 上手く書けるときと書けないときがあって、どの話でも上手く書けるようになりたい。グループで文章の疑問を解決していくのが楽しかった。「不便の価値を見つめ直す」の要約が難しかった。

【B】

小学生のときよりは、国語が好きになったし、デジタルで授業の感想を入れるのはいいと思った。教科書の読み取りが苦手だったが、グループで活動していくのが楽しくなり、少しできるようになった。

(3) 単元の設定

ア 単元・・・中学2年生 多様な視点から 構成をとらえ、説明の工夫を考える

「クマゼミ増加の原因を探る」(沼田英治 国語2 光村図書 2021)

イ ねらい

本教材は、科学的な検証の過程を提示した文章であるという特性から、極めて有効に図表が用いられており、図表の効果を考えたり、筆者の伝えたい内容を読み取ったりすることをねらいとしている。

また、研究のきっかけ、仮説を立てるうえで前提となる気温や湿度の影響を受ける時期、三つの仮説に対する調査と検証、検証をふまえたまとめといったように、科学的検証にとっての重要な過程が、順序よく配列されていることを読み取る。

(4) 実践

仮説③より、初読の感想で「なぜ筆者はクマゼミを選んだのか」という疑問をもった生徒がいた。その後クラスで共有すると、筆者にとってクマゼミは「セミの王様」というくらい好きだから研究の対象になったという意見が出た。その後、インターネットでも調べたいという声があがったため、クラスで協力して調べた。セミ以外にも研究されている生物があり、なかなか結論にたどり着くことができなかった。筆者の研究の根本に意識をむけられたことはいいが、結論にいくための方法を考えたいと思う。また、第3時には仮説の書き方についても考える授業を行った。

問1 なぜ仮説1から仮説3の順番で書かれているのか。

- ・前提に書かれているように卵→ふ化→幼虫の順で並んでいるから
- ・成功の確率順に並んでいるから

問2 ではなぜ成功した仮説3のみ書かなかったのか

- ・仮説1、2があるから説得力が増しているから
- ・仮説1、2がないと「この地域の都市化、気温上昇、湿度の低下」の説明とつじつまが合わないから
- ・仮説1の失敗をもとに仮説2を行い、仮説2の失敗をもとに仮説3を行っているから

このように仮説の流れや仮説がある意味を考えることによって、説得力のある文章の書き方や筆者がこのような文章構成で本文を書いた理由を考えることができた。

最後の授業の感想でも【B】は、以下のように筆者の書き方に関心を寄せて書くことができた。

クマゼミ増加の原因を伝えるときに、筆者が検証によって否定された仮説もあげていたところが印象に残りました。その理由は、否定されている仮説でも、前提から簡単に考えられる仮説を先にあげ、否定されている理由を説明してからの方が、読者が結果に納得しやすいからなのではないかと考えました。

4 成果と今後の課題

(1) 仮説①

生徒の1年間の振り返りでは、デジタルポートフォリオを使用することがよいと答えた生徒が8割以上いた。その理由としては、「シャーペンで書くより、タブレット端末の方が書きやすい」「1年間の書いたことが振り返られる」「書くことで書く力が上がる気がする」「感想を伝え合うことで考えが広がる」などがあつた。しかし、タブレット端末に書くことを苦手とする生徒はまだいる。書く内容について個別で伝えたり、書き出しを伝えたりするなど個別的な指導も行っていく。

(2) 仮説②について

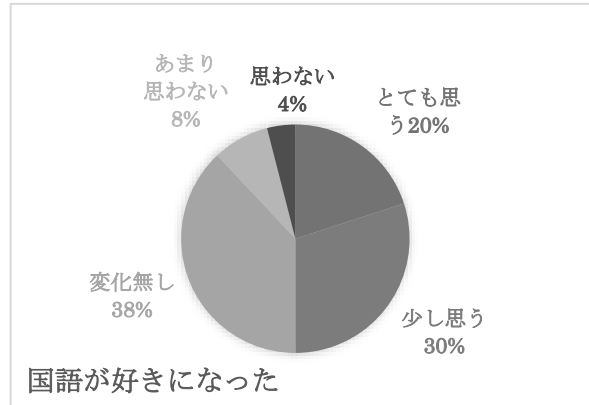
図表のわかりやすさを知り、図表を用いることはできるようになった。自分で問いを投げかけたり、段落構成について考えたりすることができるようになった理由は、説明文で筆者の工夫を見つけることができたからだと感じる。書き方がわからないという生徒も本文のまねをすることで書くことがすすめることができた。

(3) 仮説③について

筆者の意図を考えること「読み取りが深まった」「前より意味がわかった」「本文の細かいところまで読むようになった」という意見が出た。正しく読むことにもつながり、その書き方を学ぶことで生徒自身の書く力の向上にもつながると感じる。

資料 5

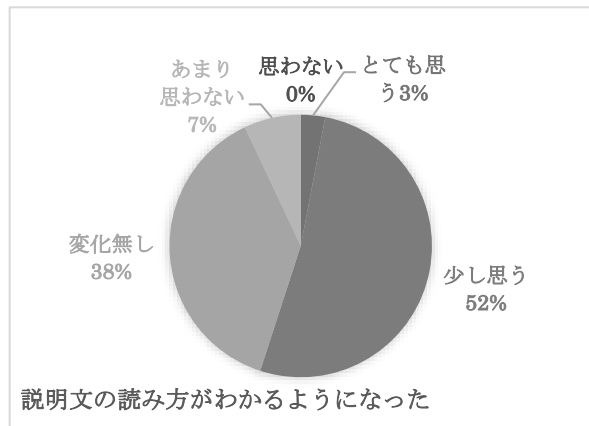
生徒に行ったアンケート調査が資料5から7になっている。この調査から、説明文の読み取りがわかるようになった生徒が半数以上にのぼる。しかしまだ書くことに苦手意識をもっている生徒は多数いる。文章を書くときやパフォーマンス課題を課しているときにもよく聞いた言葉が「何を書いているかわからない」だった。しかしパフォーマンス課題のように評価基準を与える



ことでどんな点に気をつけて書いたらいいかわかった生徒もいた。また教材で学んだことをほかの教材にいかす活動を取り入れたことで教員側も生徒の実態をつかむことができた。

資料 6

今後の課題としては、説得力のある文章を書くためにも正しく文章を読み取る必要がある。そのために、なぜ筆者は図表や挿絵をいれたのか、なぜ筆者は教材に記載してある文体で書こうとしたのかというように、もっと筆者の意図をとらえながら正しく、豊かに説明文を読み取ることをしていきたい。また日頃から書くことが苦手だと感じる生徒は、自己評価を低くつけている傾向にあった。自信をつけさせるように、書く活動の後にはよくなった点を褒めたい。今後も正しく読み取ったことをいかしながら書くことに少しでも意欲的になるようなでだてを施していく。



資料 7

